①
汪倫に贈る　（李白）

李白舟に乗って将に行かんと欲す
忽ち聞く岸上　踏歌の声
桃花潭水深さ千尺
及ばず汪倫が我を送るの情に

②
鸛鵲楼に登る　（王之渙）

白日山に依って尽き
黄河海に入って流る
千里の目を窮めんと欲し
更に上る一層の楼

③
京都東山　（徳富蘇峰）

三十　六峰雲漠々
洛中　洛外雨紛々
破簦短褐来って涙を揮う
秋は冷やかなり殉難　烈士の墳

④
金州城下の作　（乃木希典）

山川草木転た荒涼
十里風腥し　新戦場
征馬前まず人語らず
金州　城外　斜陽に立つ

⑤
九月十三夜陣中の作　（上杉謙信）

霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併わせ得たり能州の景
遮莫　家郷遠征を懐う

⑥
九月十日　（菅原道真）

去年の今夜清涼に侍す
秋思の詩篇独り断腸
恩賜の御衣今此に在り
捧持して毎日余香を拝す

⑦
胡隠君を尋ぬ　（高啓）

水を渡り復水を渡り
花を看還花を看る
春風　江上の路
覚えず君が家に到る

⑧
江南の春　（杜牧）

千里　鶯　啼いて緑　紅に映ず
水村山郭酒旗の風
南朝　四百八十寺
多少の楼台煙雨の中

⑨
事に感ず　（于濆）

花開けば蝶枝に満つ
花謝すれば蝶還稀なり
惟　旧巣の燕　有り
主人貧しきも亦帰る

⑩
後夜仏法僧鳥を聞く　（空海）

閑林独坐す草堂の暁
三宝の声一鳥に聞く
一鳥　声有り人心　有り
声心雲水倶に了了

⑪
坂本龍馬を思う　（河野天籟）

幕雲日を掩うて日将に傾かんとす
南海の臥龍帝京に翔ける
一夜狂風　幹を折ると雖も
維新の大業　君に頼って成る

⑫
酒に対す　（白居易）

蝸牛角上　何事をか争う
石火光中　此の身を寄す
富に随い貧に随い且らく歓楽せよ
口を開いて笑わざるは是れ癡人

⑬
舟中子規を聞く　（城野静軒）

八幡山崎春暮れんと欲す
杜鵑血に啼いて落花流る
一声は月に在り一声は水
声裡の離人半夜の舟

⑭
春暁　（孟浩然）

春眠　暁を　覚えず
処処啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知んぬ多少ぞ

⑮
清平調詞　その一　（李白）

雲には衣裳を想い花には容を想う
春風　檻を払うて露華濃かなり
若し群玉　山頭に見るに非ずんば
会ず瑶台月下に向って逢わん

⑯ **雪梅**　（方岳）

梅有り雪無ければ精神ならず
雪有り詩無ければ人を俗了す
薄暮詩成って天又雪ふる
梅と併せ作す十分の春

⑰ **桑乾を渡る**　（賈島）

客舎并州已に十霜
帰心日夜咸陽を憶う
端無くも更に渡る桑乾の水
却って并州を望めば是れ故郷

⑱ **中庸**　（元田東野）

勇力の男児は勇力に斃おれ
文明の才子は文明に酔う
君に勧む須らく中庸を択び去くべし
天下の万機は一誠に帰す

⑲ **長城**　（王遵）

秦 長城を築いて鉄牢に比す
蕃戎 敢えて臨洮に逼らず
焉くんぞ知らん万里連雲の勢
及ばず堯階 三尺の高きに

⑳ **早に白帝城を発す**　（李白）

朝に辞す白帝彩雲の間
千里の江陵 一日にして還る
両岸の猿声啼いて住まざるに
軽舟 已に過ぐ万重の山

㉑ **時に憩う**　（良寛）

薪を担うて翠岑を下る
翠岑路は平かならず
時に憩う長松の下
静かに聞く春禽の声

㉒ **常盤孤を抱くの図に題す**　（梁川星巌）

雪は笠檐に灑いで風袂を捲く
呱呱乳を覓むるは若為の情ぞ
他年鉄枴峰頭の嶮
三軍を叱咤するは是れ此の声

㉓ **日本刀を詠ず**　（徳川光圀）

蒼竜 猶お未だ雲霄に昇らず
潜んで神州 剣客の腰に在り
髯慮鏖にせんと欲す策無きに非ず
容易に汚す勿れ日本刀

㉔ **母を奉じて嵐山に遊ぶ**　（頼山陽）

嵐山に到らざること已に五年
万株の花木 倍 鮮妍
最も忻ぶ阿母と衾枕を同にし
連夜香雲暖かき処に眠る

㉕ **楓橋夜泊**　（張継）

月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火愁眠に対す
姑蘇城外の寒山寺
夜半の鐘声 客船に到る

㉖ **無題**　（阿倍仲麻呂）

義を慕う名空しく在り
忠を輸すも孝全たからず
恩に報ゆる幾日も無し
国に帰るは定めて何れの年ぞ

㉗ **夜墨水を下る**　（服部南郭）

金竜 山畔江月浮ぶ
江揺ぎ月湧いて金竜 流る
扁舟 住まらず天水の如し
両岸の秋風 二州を下る

㉘ **両英雄**　（徳富蘇峰）

堂々たる錦旆関東を圧す
百万の死生談笑の中
群小は知らず天下の計
千秋 相対す両英雄

㉙ **涼州詞**　（王翰）

葡萄の美酒夜光の杯
飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
酔うて沙場に臥す君笑うこと莫かれ
古来征戦幾人か回る

㉚ **廬山の瀑布を望む**　（李白）

日は香炉を照らして紫烟を生ず
遥かに看る瀑布の長川を挂くるを
飛流 直下 三千尺
疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと